

第五章 ハロウイーンの習俗と異界

浜本隆志

一 ハロウイーンのルーツ

島のケルトの新年 イギリスやアイルランドは、現在でもケルト人の末裔が住む島として知られている。ここには紀元前三〇〇〇年も前に、先住民族が巨大なストーンヘンジをつくり、独自の先史文明の巨石遺跡がすでに存在した。かれらは巨石から太陽の昇る位置を観察し、冬至、春分の日、夏至、秋分の日を割り出すことができた。こうして正確に季節を把握したかれらは、ストーンヘンジで冬至祭や夏至祭をおこなっていた(図5-1)。

古代ローマや他民族に追われたケルト人は、大陸からイングランド、スコットランド、アイルランドの巨石文化の地へ渡り、この地の先住民族と確執を繰り返しながら、かれらの祭りや習俗を取り入れた文化をつくった。やがてケルト人もアングロサクソンに追われ、大ブリテン島から最果てのアイルランドに逃れるものが多かった。

海洋性のアイルランドの秋の気候は、日暮れが早く霧を誘発した。西方の果ての海岸から先にはもう陸地が行き止まり、はるかに広がる大西洋の大海原しかなかった。島にはゴツゴツとした岩の出た独特の地形があつて、黄昏



図5-1 イギリス南部のストーンヘンジとその外縁にあるヒールストーン（溝井撮影）
ストーンヘンジの真ん中に立ってヒールストーン（中段左側の立石）を見ると、太陽はそのままストーンヘンジの中央部を照らすので、6月21日の夏至にそこから太陽の昇るのが観察される。同様に、冬至の正確な時期もわかるように立石が置かれていた。

ともなると超常現象が起こり、異界とこの世の境界が交錯する地の果ての印象が強い。

ここは現在ではカトリック地域であるが、妖精、精霊、魔女、妖怪伝説が多く残っている。しかしこれらはキリスト教文化が生みだしたのではなく、古代の神々がデフォルメされたものと解釈されてきた。アイルランドの地に多数の伝説、神話が残っているのは、もともとアニミズムにもとづく自然信仰が信じられてきたからである。ハロウィーンはその典型的な習俗のひとつであるが、これと来訪神信仰との関係について、島のケルトを中心に検討してみよう。

ハロウィーンはケルトの祭りではサウインといわれる。祭りは秋の季節の変わり目に設けられ、一〇月三十一日の夜に祝われていた。すでに述べたようにケルト暦では本来、農作業、牧畜の区切りによって季節を区分し、夏と冬のふたつしかなかった。したがってハロウィーンは、ケルトでは新年への転換期にあたり、もともとケルトの正月を迎える祭りであった。この冬の時期には穀物の収穫が終わり、家畜は小屋へ一定数しか収容できないので一部だけ残し、その他を屠畜し、冬場の食糧として塩漬けの保存食に加工した。

まずハロウィーンの語源は、聖夜をあらわす All Hallow's Eve → Hallow Even → Halloween に由来するが、これは次の十一月一日の「諸聖人の日」と対になっていることがわかる。歴史的に確認できるのは、八三五年にルートヴィヒ敬虔王がハロウィーンの次の日を「諸聖人の日」と制定、殉教したキリスト教の聖人を祝うようになったという時代経緯である。バーバラ・ウォーカーは、ハロウィーンには異教の習俗の痕跡が残っていることを次のように指摘している。

異教の太陰暦によると、祭りは一般にその当日ではなく、「前夜」に行なわれた。したがって、ハロウィーン、

すなわち「諸聖人の祝日の前夜祭」（一〇月三十一日）が本来の祭りだったのであり、それが、のちになって翌日に移されたのだった。アイルランド人は、この聖なる夜を「サマンの前夜祭」と呼んでいた。キリスト教会側の人々の記述によると、この夜には魔法のまじないや占いが行なわれ、魔女の鏡やクルミなどの堅果の殻を燃やした灰を用いて未来を予言したり、桶の水に浮かんでいるリング（再生の大なべ）の中の靈魂のシンボルを口にくわえて取ろうとしたり、その他各種の嫌悪すべき儀式が展開されたという。（『神話・伝承事典』、山下圭一郎・他訳）

本来、大陸のケルト人たちがハロウィーンを祝っていたが、島のケルト人もその習俗を取り込み、ここでも継承していった。しかしキリスト教からみれば、ハロウィーンの異教的要素はけつして好ましいものではなく、この祭りを否定して、キリスト教の「諸聖人の日」へ転換しようとしたことがわかる。ではここで、ハロウィーンの習俗における異教的世界をまず確認しておこう。

ケルトの異界とハロウィーン ケルトの異界は伝説では海上にあるという事例も認められるが、それよりも多くの場合、陸地のなだらかな丘陵地の地下にあるとされた。まずアーサー・コットレルの『世界の神話百科』では、ケルトの異界が次のように描かれている。

ケルト神話に登場するきらびやかな異界は、神々の精霊、妖精、小妖精「鬼火や小人など」、さらに不恰好な巨人たちからなる不可視の王国である。そこには光り輝く楽園があり、陰鬱な地獄もある。だが、目に見える

世界と見えない世界の間の幕はきわめて薄く、簡単に裂けてしまう。賢者や吟遊詩人は精神の飛翔や靈魂の旅によってこのふたつの世界を出たり入ったりしていた。……異界の入口はいつたいに水のほとりであった。そこには狭い橋がかかっており、光り輝く地下世界ないし暗い地獄を隠した墳丘や井戸の下に通じていた。一月三十一日のサヴィン祭前後には、異界のすべての門が開けられ、不思議な精霊たちが中空の丘から出現すると信じられていた。(松村一人・他訳)

祭りの日は、異界と接触をする日でもあり、一〇月三十一日はこのように、この世とあの世の境界が開く特別の日であった。異界が開かれると、そのすき間から妖怪、妖精、女神ホルダなど超自然的なものが出現して、それが人間の世界へやってきた、フィリップ・ヴァルテールは『中世の祝祭』のなかで、さらに詳しくこのサヴィンの祭り特徴を説明している。

ケルト神話に属する物語^{レシ}では、サヴィンの日には、移行あるいは通過という特別な意味が付与されていることが多い。それは他界の存在が人間のもとに訪ねてくる時期である。……したがってサヴィンは、ケルトの伝承が伝える異界「シード」と交流することができる、特別な時期に対応している。……この概念は多くの点で、曆に認められる儀礼や神話を包括的に理解するための鍵を提供してくれる。もちろん、最終的にキリスト教の信仰は「異界」をとりこんでしまうが、この「異界」をキリスト教的な型にあてはめて考えてはいけない。「異界」は、幽霊がとくに好む場所、とりわけ妖精の世界なのである。(渡邊浩司・他訳)

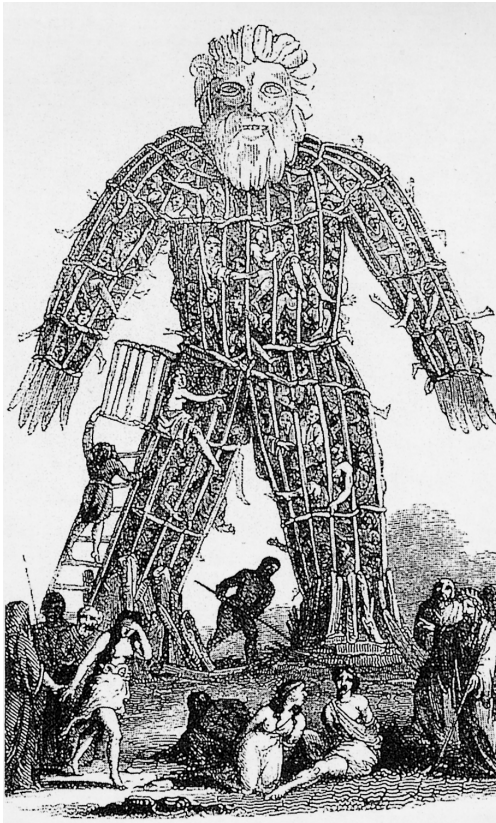


図5-2 ケルトの生贅

(ミランダ・グリーン『ケルト神話・伝説事典』)

捕虜や罪人を柳で編んだ「ウィッカーマン」に閉じ込め、焼いて神に捧げた

古い伝説によると、サウインには地下の死者の魂が死者の神に導かれ、妖怪や祖霊がこの世に出現したという。これは日本でいえば大晦日にあらわれるナマハゲの行事と類似している。サウイン祭に由来するハロウィーンは、まさしく現世と異界が交わる時空であった。同時に人間も異界へいくこともできた。さらにそれは、時間の流れを越えて過去と未来への扉が開かれ、この世と一体化する不気味な時でもあった。

本来、この祭りでは「先祖たちはハロウィーンに墓から出てきて、ときには、生きている子孫の子供たちに贈り物をしてくれた」(『中世の祝祭』)。異界が開く日には単に妖怪が出現するだけでなく、先祖霊も帰ってきてきて贈り物

をしてくれたので、これは聖ニコラウス祭や日本の正月のお年玉のしきたりと類似していた。

古代ケルトの時代には、この日にプレゼントをもらうだけでなく、神にささげる生贄の儀式があった(図5-12)。かれらは靈魂不滅を確信しており、供犠はその再生のためにもおこなった。神がこれを喜べば、死者を生き返らせてくれると信じていたからである。ここにも神と人間とのギヴ・アンド・テイクの関係が認められる。

ハロウィーンにはケルト的な異教とキリスト教の祭りが混交しているが、ローマ・カトリックはそれをネガティヴに解釈し、否定しなかった。というのもキリスト教の場合には、アニミズムにもとづく妖精や精霊信仰は、本来、存在しなかったからである。しかし、ハロウィーンの異教的要素は深く人びとの心のなかに浸透し、キリスト教といえどもこれを排除することはできなかった。このように祭りの位置づけがケルトの異教とキリスト教側では、まったく異なっていたことがわかる。

アイルランドの「ジャック・オ・ランタン伝説」

ハロウィーンの習俗には「ジャック・オ・ランタン」(Jack o' lantern)のoはofの省略形、ランタン持ちのジャックとの意)伝説が深く結びついている。アイルランド伝説によれば、蹄鉄職人のジャックは悪魔と契約を結び、優秀な職人になることを誓った。しかしかれはならずもの酒飲み癖が直らず、約束を守らなかったため、死後、地獄へいったが、怒った悪魔は地獄へも入れてくれなかった。もちろん天国にもいけず、ジャックの魂は煉獄で前方に暮れた。そのためカブに明かりを灯して、かれはランタン代わりにして天国と地獄の間をさまよい歩いたという。しかしこの話とは別に、ジャックは農夫で悪魔をだましたという伝説や、その他の話のヴァリエーションがある。なおジャックというのもともありふれた名前であり、人びとに身近で馴染み深い印象を与えるために付け



図5-3 かぼちゃのランタン

(Fischer, Anke: *Feste und Bräuche in Deutschland.*)

られたものである。

つぎに「さまよう魂」というイメージは、背景に「さまよえるユダヤ人」伝説と二重写しにされ、恐怖感をひき起こす作用をもつ。『聖書外伝』によれば、ゴルゴタの丘でユダヤ人のアハスフェルスが、十字架の重荷に耐えかね、水を所望する瀕死のキリストに対し、無慈悲なふるまいをしたので、ユダヤ人は永久にさまよい歩き続ける罰を受けたということになっている。

「ジャック・オ・ランタン」の伝説でもうひとつ重要な点は、煉獄の概念が取り入れられていることである。煉獄というのは、贖罪をはたさず、天国へすぐにいけない者が一時的にとどまる世界のことです。この世に残った縁者が精進をして善行を積み、教会へ寄進をおこなうならば、死者はそこから天国へいけるとされた。カトリックが煉獄という思想を広めたのは、現世の人びとからの寄進を期待したからである。カトリックはそのお金を教会建設や運営の重要な基金にしたが、これが後に贖宥状（免罪符）に発展し、プロテスタントを生み出す誘引となる。

煉獄の概念は本来のケルトの宗教にも存在しないものだった。歴史的には一二世紀にこれがカトリックの教義のなかに取り入れられ、伝道師たちによって広められた。煉獄は一三世紀以降ヨーロッパに一般化し、『黄金伝説』にも

触れられている。したがって「ジャック・オ・ランタン」伝説は、キリスト教化された後、広まったものと推定され、煉獄のイメージを定着させることに寄与したといえよう。

とはいえ「ジャック・オ・ランタン」伝説は、本来、ケルトの習俗にもとづき、霊が異界から出現し、それが鬼火のように漂っている様をあらわしたものである。伝説の根柢には、浮遊する祖霊が墓から懐かしいふるさとの家へかえり、子孫に暖かく迎えられ、また帰っていくようにというイメージが込められている。ハロウィーンにおける霊の出現は、具体的には仮面や仮装によってなされた。仮面は異界へ移行するためのアイテムであり、これをかぶったり、仮装したりすることは、まさしく異界の存在を可視化する装置にほかならなかったからである。

この伝説がアイルランドからアメリカへ伝えられ、ハロウィーンの習俗とともに広がった。その経緯については後述するが（一八八ページ参照）、アメリカではカブの代わり身近なカボチャが用いられ、そのなかへロウソクを灯す方式が一般化した（図5-3）。中をくりぬくのが容易であったからだ。

二 ハロウィーンと来訪神信仰

諸聖人の日と諸精霊の日 一月一日は、ケルト暦では新年であったことは触れたが、生命の再生を祝う五月祭とは対照的に、死を祀る日でもあった。一月から草木は枯れ、死の季節が訪れるからである。一月一日は死や先祖霊を祭る通過儀礼であったことがわかる。カトリックではこの日を「諸聖人の日」（プロテスタントでは「万聖節」）、一月二日を「諸精霊の日」として祝う。前者はキリスト教の聖人を祝うが、後者は死者を追悼する行事をおこなうものと区別された。いうまでもなくこれは、異教の習俗をキリスト教化するプロセスのなかで生まれたものであ



図5-4 諸精霊の日 (Fischer, Anke: *Feste und Bräuche in Deutschland.*)

る。

もともと、ケルト人のみならずヨーロッパ全域においても先祖霊がこの頃、子孫のところへ帰ってくるという信仰があった。それに対してローマ・カトリックは、九九八年に十一月一日を、キリスト教の聖人を祝う日と定めた。そして個人的な先祖霊を次の日に移行させたのは、後者を排除することができなかったことを物語る。

ヨーロッパにおいても封建制度が示すように、身分を継承するのは血のつながった親子の系譜であったし、遺産相続も同様のシステムでおこなわれた。そのために先祖供養は重要な子孫の務めであり、キリスト教といえどもこれを無視することができなかつた。「諸精霊の日」のルーツは四世紀にさかのぼるが、現在ではハロウィーンは「諸聖人の日」の前夜祭として定着している。

「諸精霊の日」には、信仰に厚い人は黒い服を着て墓参りへゆく(図5-4)。ヨーロッパの墓地は

きれいに手入れされ、一種の公園のような印象を受ける。人びとは近親の死者や先祖をしのんで、一晚中消えない大きなロウソクに火をつける。筆者も南ドイツで、この日の夜になると、無数のロウソクの炎によって墓全体が浮かび上がる幻想的な光景を見た。まるで日本のお盆の「万燈会」と同様であり、これは本来、先祖霊の拠り代と解積できるけれども、ヨーロッパの人びとは今やそのように考えるものはいない。

たしかに「諸精霊の日」は、現在では先祖の追悼祭いえるが、キリスト教は先祖霊の来訪という意味にはとらえない。死者の世界と生者の世界には大きな断絶があるからだ。かつて死者は教会墓地に埋葬されていたが、満杯になると納骨堂へ移され、それでも足りなくなると、共同墓地がつくられた。

そのひとつとして現在のドイツの市営墓地では、一定年数を過ぎれば、ブルドーザーで整地し、再分譲をするという方式をとっている。これは故人を知っている世代だけ、死者を追悼すればいいという合理的な考え方に依拠している。したがって最近のヨーロッパでは、この種の来訪神信仰は存在せず、それはキリスト教のこの世とあの世が断絶した死生観に起因するものといえよう。

聖ユベール祭 ハロウィーンと来訪神信仰とのかかわりについては、フランス中世に祝われていた聖ユベール祭がもっとも重要である。これは一月三日に設定されていたが、なぜ三日なのかといえば、先述の一月一日、二日はすでに諸聖人や精霊を祭る日であったので、これらの次の日に移動させられたものと推定される。聖ユベールは狩人の守護聖人であって、由来については次のようなエピソードが伝わっている。

フランスのアキテーヌの領主の王子であったユベールは、キリストの受難の「聖金曜日」も忘れて狩りに熱中していた。すると森のなかで角に十字架像をひっつけた雄シカがあらわれ、その碑文には神の受難日に狩りをする非

をいましめる文言が書かれていた。自分の行為を激しく悔いたユベールは、神に帰依して後にとつとつ司教となり、布教に邁進した。やがて聖者に列せられたかれは、その後、狩りの守護聖人にもなって、人びとの敬愛を集めたという（フィリップ・ヴァルテール『中世の祝祭』参照）。

これはシカがキリストの使者とみなされているので、キリスト教の立場からのエピソードであった。しかし根底には、キリスト教以前の異教的な来訪神信仰の痕跡が認められる。その事情はこの話のルーツともいえる種本をたどると、より明確になろう。

アイルランドに伝わるケルト伝説のなかには、英雄フィンの物語群があり、筋の展開はおよそこうである。フィンが狩りの途中、森で出会った牝シカを連れてかえり、飼うことにする。するとシカは若い女性に変身し、かれは魅力的な彼女と結婚する。しかし魔法を使うドルイド僧が妻を奪い、彼女は森へ消えてしまう。時が過ぎ去り、あるときフィンが森で狩りをしていたとき、少年に出くわす。その少年の素性を尋ねると、結局、かれはシカに変身して消えた妻が産んだ自分の息子であることが判明する。

ここにはシカと人間の結婚が展開されているが、ケルトではシカはもともと神の動物であった。これはサウインにまつわるアイルランドの英雄伝説と密接に結びつくエピソードであることがわかる。すでに触れたように、聖ユベール祭は一月三日に移されているが、もともとハロウィーンの時期に祝われていた。シカは神の使者か神そのものであり、英雄フィンの物語の展開は、異界が開く日にシカが出現し、神との交流によって、結婚がおこなわれた。その結果、神の子どもを授かり、異界は閉じられたというものである。

古代においてはこのような動物と人間、人間と神との変身は、日常でもおこったが、とくに祭りの時空においては普通のことであった。聖ユベール伝説のルーツから、われわれは古代の来訪神信仰の痕跡を確認することができる。



図5-5 手作りランタンをもつマルチン祭の子ども（筆者撮影）

ると考える。

ハロウィーンと聖マルチン祭 ハロウィーンと来訪神
仰との関係でいえば、一月二日の聖マルチン祭（フ
ランスではマルタン祭）も無視できない。これはヨー
ロッパにおける一連の冬祭りの始まりと解釈されてい
るからである。実在の人物であるマルチンは、古代ロ
ーマ時代の三二六年―三二七年ごろ生まれたが、兵士
としてガリア（フランス）のトゥールへやってきた。
そこで洗礼を受け、修僧院を建てて布教活動に専念し
た人物であった。晩年の三七一年に、かれは司教に選
ばれ、人びとの尊敬を集めたが、三九七年一月八日
に死去した。

聖マルチン祭の由来は、よく知られたエピソードに
もとづく。四四ページでも触れたが、まだ洗礼前のマ
ルチンが騎行していたとき、空腹と寒さに震えていた
乞食に出くわす。かれはかわいそうに思って剣を用い
て自分のマントを半分切り、乞食に与えたのであるが、

その乞食はキリスト自身であったという伝説が残っている。

この時期に定められているハロウィーン、聖ユベール祭、「燻し夜の祭り」などは夜祭りであったが、現代でも聖マルチン祭は十一月一日の夜、おこなわれる。筆者がドイツで見たマルチン祭には、幼稚園児や小学生たちがロウソクを灯した手づくりのランタンをもちより、マルチン行列を待ち構える(図5-5)。馬に乗った聖者一行が暗闇からあらわれると、子どもたちがランタンをかざして教会前の広場へ案内する。広場ではマルチン一行を囲んでみんなの賛美歌合唱がはじまる。祭りのクライマックスは乞食にマントをきり与えるという伝説の再現劇である。それから全員でマルチンを讃える歌を歌う。マルチンはそれに感謝をし、子どもたちにプレゼントを渡す、という趣向である。

この劇には慈悲の精神を称え、キリスト教の教えを広めるといふ教訓が込められているが、マルチン祭ではマルチンがプレゼントを与える側になり、さらに乞食に扮した神が背後に出現し、かれの行為を顕彰するという構造になっている。しかし聖マルチン伝説の類話では、乞食に変身したキリストがマルチンに魔法の杖を授けるといふヴァリエーションもある。聖マルチン祭はキリスト教化されたかたちで筋書きが展開しているけれども、根底においてはここからギヴ・アンド・テイクの来訪神信仰の構造がみてとれるのである。

聖マルチン伝説にもルーツがあつて、一連の冬の到来における先祖霊を迎える土着の行事がキリスト教化されたものといわれている。というのもこの日を境に、暖炉に火を入れ、もはや畑仕事をしないとすることになっているからだ。マルチン祭のイヴには、ガチョウのご馳走でこの夜を祝う。クリスマスイヴにガチョウを食べるのが欧米の慣行であるが、それを前倒しした一種の異教の冬祭りのマルチン祭にも、同様な食文化のルーツがあつた。したがって聖マルチン祭はクリスマスと競合するのを避け、キリストの使徒を聖人伝説化したものであつたといえる。

三 ハロウィーンの伝播と変遷

ハロウィーンから「ガイ・フォークス・デイ」へ イギリスではケルトの習俗の影響で、ハロウィーンが祝われていたが、一七世紀のはじめにガイ・フォークス事件が発生し、様相が一変した。この事件の概要はこうである。一六〇五年一月五日にガイ・フォークス一味が議事堂を大量の火薬で爆破しようとした。かれらはカトリック側の立場に立ち、国教会派のジェームス一世の暗殺計画をくわだてていた。しかしこの陰謀が発覚し、ガイ・フォークスらは逮捕され、拷問の後、計画を自白したが、結局、はらわしたを切裂かれ（ユダの処刑と同様）たり、絞首刑に処せられたりした。

イングランド国教会の王党派は、事件が発覚した一月五日の前の晩に、「ガイ・フォークス・デイ」という祭りを設定した。この事件を忘れないように記憶に刻み付けるためである。当日、ガイ・フォークス一味の巨大な人形が広場にかざられ、そのなか
に花火が仕込まれた。祭りの最後にこれに火をつけ、花火大会も



図5-6 ガイ・フォークス、右から3人目 (National Portrait Gallery, London)

どきのイヴェントをおこなった。この祭りの方が刺激的で派手であったので、当然、五日前のハロウィーンより人氣が高まった。しかし背景に、イギリス王室と国教会（プロテスタント）の立場に立つ宗教的意図が深くかかわっている。

イギリス国教会側は、カトリックや異教的な要素が残っているハロウィーンの習俗を意図的に否定したといえよう。かれらはもともと、カトリックの儀礼や祭りを苦々しく思っていたからである。こうしてイギリスではハロウィーンの習俗は影が薄くなり、ほとんど忘れ去られるのである。それとは対照的に、「ガイ・フォークス・デイ」が定着していく。しかしアイルランドではカトリックがその後も継承され、ケルトの習俗のハロウィーンが存続した。ピューリタン（プロテスタント）とカトリックという宗教的対立は、それ以来、二〇世紀まで続いたアイルランド紛争の一因となるのである。

アメリカからヨーロッパへ ハロウィーンの発生地であるアイルランドやスコットランドは地味がやせていたので、ひとたび飢饉がくると多くの死者を出し、人びとは慢性的に生活に苦しんでいた。その打開策のひとつとして、一八七〇年代にアイルランド人の一部が新天地を求めてアメリカ東岸部へ移住した。かれらはアメリカでも故郷の習俗を懐かしみ、一〇月三十一日にハロウィーンを祝った。それはアメリカでのアイルランド人のアイデンティティ確立のためであった。この伝統がアメリカ社会で受け入れられ、次第にかれの習俗は全土へ広まっていった。

一九世紀―二〇世紀にかけてアメリカでは、ハロウィーンは子どもを中心にした祭りに変貌していった。アイルランド出身者だけでなく、ヨーロッパやアフリカの他地域からの移民たちは、自分たちの祭りをもっていなかったので、バラバラの共同体をつなぎあわせるために、ハロウィーンを共同体の核にした。

さらに子どもたちはお化け、妖怪、魔女の仮面を被ったり、怪物に仮装をしたりして、地域の家々をまわって、掛けことば「Trick or treat」(お菓子をくれなさい、いたずらするぞー)と叫びながら、お菓子を集めて、みんなでお菓子を楽しんだ。その結果、これが子どもたちだけでなく、コミュニティの結束の役割を果たした。このシーズンになると、ハロウィーン・グッズの商業化が盛んになる。

二〇世紀末のグローバル化のながれのなかで、一九九〇年代にアメリカのハロウィーンの習俗がヨーロッパへ流した。それはつい最近のことであり、筆者も九〇年代にドイツにいたとき、レストランでもカボチャの飾りを見る機会が多くなってきた。とくにフランスでは一九九七―九八年以降、ハロウィーンがブレイクした。アメリカ文化の受容というより、この祭りにちなむ大々的なイベントが人びとに受けたからではなからうか。

流行のきっかけは、フランス・テレコムが一九九七年一月に八五〇〇個のカボチャのランタンをエッフェル塔の広場に並べたことによる。商店もハロウィーン・グッズを大々的に宣伝し、展示するようになった。当時、この習俗は、世界的に有名になったハリ―ポッターの魔術映画のヒットと連動したイベントでもあった。これはフランスの農業にも大きな影響を与え、カボチャの生産量が倍増するという現象がおき、農業経済がうるおった。

ところがキリスト教(カトリック)側は、この風潮をこころよく思っていなかった。フランスを中心にローマ・カトリック側から、ハロウィーンに対する反対運動が高まっていった。ハロウィーンはカトリックの教義に反するからという理由である。かつてフランスでは、一九五一年にサンタクロース人形を焼く事件があり、物議をかました(五四ページ参照)が、これが繰り返された。

こうして一九九〇年代後半にハロウィーンに対しても、フランスのカトリックは同様な行動をとったのである。教会はハロウィーン十字軍を結成し、異教的な祭りを槍玉に挙げた。これにはヨーロッパにおけるカトリックの衰

退が背景にある。若者を中心に、教会に礼拝に行く人が年々少なくなってきたり、その危機感もあって、カトリックは異教的な習俗に対して神経質になっているものと考えられる。しかしハロウィーンの習俗は、それを跳ね返し、フランスだけでなくドイツでも定着していった。

近年、日本でもハロウィーンという言葉をよく耳にするようになった。とくに日本の商業資本が、二〇〇〇年ごろから祭りに着目、これを流布させようと積極的にメディア戦略を打ち出している。かれらはハロウィーン・グッズの販売キャンペーンをおこない、イヴェントをくりかえしてきた。最近では東京デイズニールランドのハロウィーン祭りのテレビ・コマーションが大々的におこなわれている。

それと同時に、英会話学校や幼稚園でハロウィーンの話題が取り上げられ、生徒や園児の人気を博すようになった。ただしその際、日本では子どもが仮面をつくったり仮装をしたりすることはあっても、近所をまわってお菓子を集める習俗は導入されていない。

この習俗はクリスマスやヴァレンタインデーと同様に、今後、日本でも子どもを中心に家庭で拡大することが予想される。アメリカへ留学する若者が、ハロウィーンを現地で体験し、その習慣を日本において広める役割を果たす。多神教の宗教的背景をもつ日本において、外国の習俗でもこだわりなく受容する素地が存在するからである。

参考文献

- フィリップ・ヴァルテール 『中世の祝祭』 渡邊浩司・他訳 原書房 二〇〇七年
 バーバラ・ウォーカー 『神話・伝承事典』 山下圭一郎・他訳 大修館書店 一九九八年

- ミランダ・グリーン 『ケルト神話・伝説事典』 井村君江・他訳 東京書籍 二〇〇六年
マドレーヌ・P・コズマン 『ヨーロッパの祝祭典』 加藤恭子・他訳 原書房 一九九五年
アーサー・コットレル 『世界の神話百科』 松村一男・他訳 原書房 一九九九年
ブルーデンス・ジョーンズ・他 『ヨーロッパ異教史』 山中朝晶訳 東京書籍 二〇〇五年
ヤン・ブレキリアン 『ケルト神話の世界』 田中仁彦・他訳 中央公論社 一九九八年
牧田茂 『神と祭り日本人』 講談社 一九七二年
Fischer, Anke: Feste und Bräuche in Deutschland, München 2004.